

私の存在に関わる最も深く私的な領域に、
不当に土足で侵入されました。
それは私の選手としての権利だけでなく、
私の尊厳とプライバシーの権利を含む、
人間としての根本的な権利を犯すものでした。

**「女性であるための身体の規範・基準」による女性からの排除
(キャスト・セメンヤと性分化疾患を巡る倫理的論考)**

ヨヘイル (ネクスDSDジャパン)
第30回日本生命倫理学会年次大会 2018/12/9

ネクスDSDジャパン

- DSDsについての**正確な情報**の提供
(⇒オランダSCP報告書)
(cf. 「性の多様性」⇔HIVの**正確な情報**)
- 欧米のサポートグループ (SG) の情報を提供することで、日本のDSDsの各体の状態に応じたSGの設立・活動を促す
- 子育て上の情報 (ネットなどでは**不正確な情報**ばかりで、**正確な情報**がほとんど無い状況)
- 患者・家族の方をエンパワメントできる**当事者・家族の皆さんの体験談**
「あなたはひとりじゃない」

- 南アフリカ共和国の女子800M走者。
- 2009年 (18歳時) ロンドン世界陸上の優勝後、マスコミが、「染色体がXYで精巣があり、子宮はなく、**“アンドロゲン”が典型的な女性よりも3倍ある“両性具有”**であった」と暴露。
- その後一時自殺予防センターに入っていたとされる
- 世界陸上連盟 (IAAF) の、**アンドロゲン値を薬理的に下げる規制**に従い、競技に復帰。
- 2015年、他の女性選手の提訴により、スポーツ仲裁裁判所 (CAS) がアンドロゲン規制一時保留の裁定。
- 2018年、IAAFが**新たなアンドロゲン規制を発表**。
- 実質上セメンヤだけを女性競技から排除するものとして、南アフリカ陸上連盟とともにCASに提訴。

Caster Semenya

Dutee Chand

- インドの女子100M競技者。
- 2014年、インド陸連より「**性別検査**」を強要される。
- 「**高アンドロゲン症**」を理由に出場停止に。
- チャンドはスポーツ仲裁裁判所に提訴。
- IAAFの「高アンドロゲン規制」は一時保留状態に。

1. ONE TRACK MINDS

セメンヤの個人情報暴露時の世論の反応の問題点

2. 性分化疾患に対する誤解をもたらす「**社会生物学的規範**」
3. 現在の問題点：**女性差別と有色人種差別の問題**
4. DSDsを持つ人々の「**標本化 (OBJECTIFICATION)**」



1. ONE TRACK MINDS

セメンヤの個人情報暴露時の世論の反応の問題点



Katrina Karkazis

- エール大学生命倫理学者
- 長年DSDsを持つ人々のアドボケイトを行っている。
- 近年では特に「高アンドロゲン状態」の女性スポーツ選手が被る倫理的問題を扱う。



ONE TRACK MIND

Semenya, Chand & the Violence of Public Scrutiny

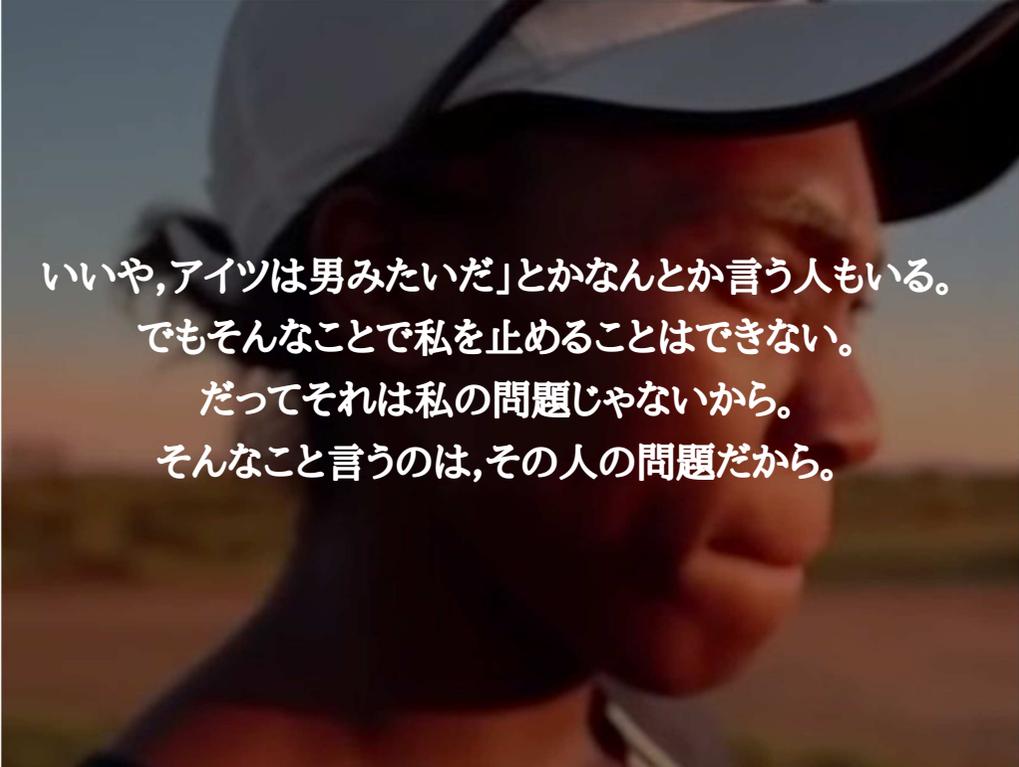
「偏狭な」「一方通行」「一途な」の意味

ONE TRACK MIND 偏狭な心

両性具有で精巣もあるなんて
女性とは認められない

アンドロゲン値も高い。子宮もない。
女性ではないのだから、女性競技に出るべきではない。

あなたの「女性の身体」の定義は、とても狭量ではありませんか？



いいや、アイツは男みたいだ」とかなんとか言う人もいる。
でもそんなことで私を止めることはできない。
だってそれは私の問題じゃないから。
そんなこと言うのは、その人の問題だから。

ONE TRACK MIND 一方通行の心

男性と女性に境界はないのです。
男でも女でもないインターセックスという性別を認めるべき。

男女二元論が悪い
スポーツや社会は男女を分けるべきではない

それは、彼女の望みなのか？それは果たして誰の望みなのか？

いいえ。彼女が戦っているのはそんなことじゃない。
そんなこと言うのは選手に対して害悪にしかならない。



2016年8月2日付けAP通信の

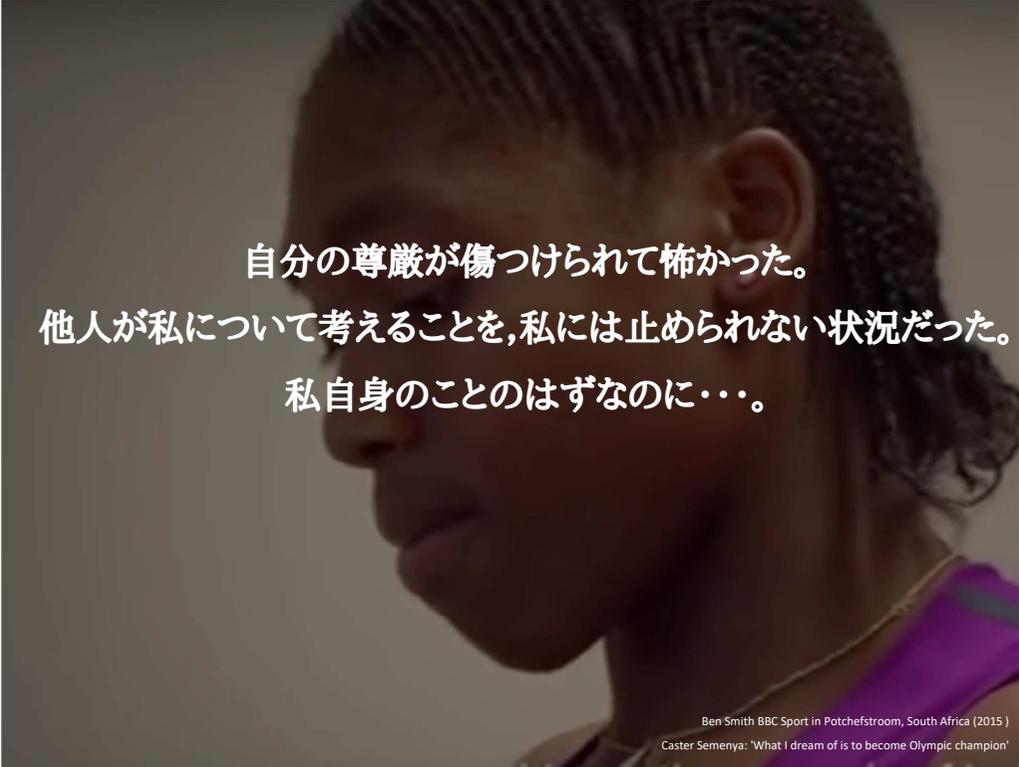
「南アフリカのセメンヤは、スポーツ界の性別二元制と戦っている」

というタイトルを冠した記事に対して、インタビューを受けていたカトリーナ・カルケイジスによるTwitterでの指摘。

リポーターたちは彼女を「インターセックス」と呼びつけた。しかし私は、セメンヤ自身が自分をインターセックスだと言ったというレポートをひとつも見つけられなかった。そして彼女は、彼女をニュースの売りモノにされてしまうことも、彼女を「インターセックス選手」と呼ぶ記事も止めることはできていない。「世界は黒人のクィア(LGBTQ等性的マイノリティのこと)でインターセックスの選手を受け入れる準備はあるか？」というタイトルの記事もあった。しかしセメンヤは自分をクィアだとも語ってもない。

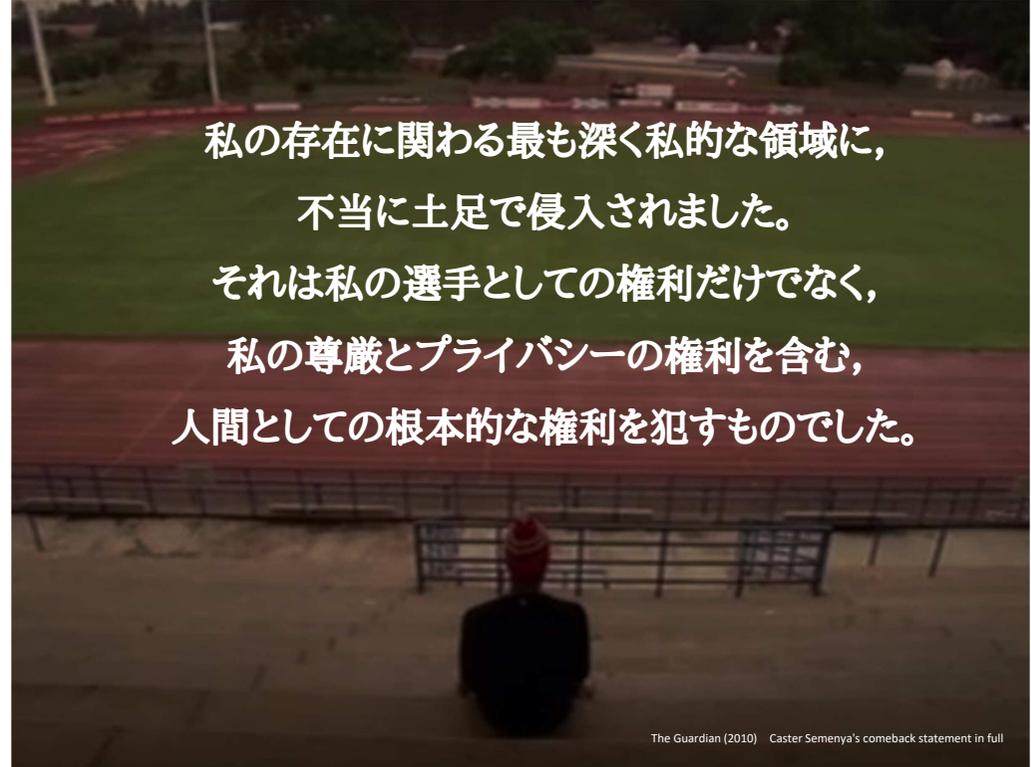
彼女の人生は、ますます彼女のものではなくなっていく。セメンヤの身体は、リポーターたちが必要とするものだったらどんなものにもなっていく。ケイト・ファーガンがTwitterで語ったとおりに。「セメンヤは女性だって分かる。だってみんなして彼女の身体を自分のモノにしようとしてるから」。

Diana Moskovitz (2016) "The Debate About Caster Semenya Isn't About Fairness"



自分の尊厳が傷つけられて怖かった。
他人が私について考えることを、私には止められない状況だった。
私自身のことのはずなのに…。

Ben Smith BBC Sport in Potchefstroom, South Africa (2015)
Caster Semenya: 'What I dream of is to become Olympic champion'



私の存在に関わる最も深く私的な領域に、
不当に土足で侵入されました。
それは私の選手としての権利だけでなく、
私の尊厳とプライバシーの権利を含む、
人間としての根本的な権利を犯すものでした。

The Guardian (2010) Caster Semenya's comeback statement in full

ONE TRACK MIND : 偏狭な心・一方通行の心

- このどちらもが、セメンヤを「女性以外の何か」と当たり前に見なしている。
(「性自認を認める」との言説も、「体はそうではない」ことが前提)
→ 性分化疾患に対する「社会生物学的規範」
- またやはりどちらもが、セメンヤの極めて私的でセンシティブな領域であるはずの「生殖器」の話を、まるで当たり前であるかのように「議論的」にしている。
→ 性分化疾患を持つ人々の「モノ化・標本化・自己目的化 (OBJECTIFICATION)」

Who is Caster Semenya? Should the 'intersex' athlete be ALLOWED to compete as a woman?



CASTER SEMENYA has sparked a huge debate about who should be allowed to compete in the Olympics after storming through to the women's 800m final.

By REISS SMITH
PUBLISHED 08:27 PM Aug 19, 2016 | UPDATED: 08:55 PM Aug 19, 2016
SHARE f TWEET  309

「インターセックス (中性) “選手は女性として競技するのを許されるのか?”と題する記事。しかしセメンヤ自身は自分を「インターセックス」とは一言も語っていない。彼女の私的な領域は、まるでそれが当たり前であるかのように、人々の「議論の対象的」となっていた。

The New York Times Magazine 2016年7月号の表紙。記事の内容自体は、チャンドに対する性別疑惑・性別検査を激しく非難するものであったが、彼女の写しの上に無造作に被せられた「XX」「XY」という記号は、記事の内容とは全く逆に、彼女の女性としての尊厳を激しく損なうものであった。大衆という「観客」が何を求めているのか? というセンセーショナルリズムを端的に表す例と言える。果たして彼女はこのような表象をどのように体験しているのか? これは、ひとりひとりの人間としての想像力の問題になる。



「議論的」にされるということ自体が、陵辱的・性的なトラウマになるということには、未だ想像が及ばない状況。

2. 性分化疾患に対する誤解をもたらす 「社会生物学的規範」

「性分化疾患」は包括用語でしかない。



- 患者家族会・サポートグループレベルでは、8つほどのグループに分かれる。
- 「ASEAN」程度の連合。
(相互交流は基本的になく、それぞれに独立した運営。インドネシアの人に「アセアン人ですか?」と聞いても「??」と思われるのと同じ)
- 患者家族会レベルでは、「インターセックス」はもちろん「性分化疾患」という用語も使われているところは限られていて、「AIS」や「CAH」、「ターナー症候群」など各体の状態名が使われている。

性分化疾患とは？

「男でも女でもない性」「男女の特徴を併せ持った人」「第3の性」「中間の体」

ではなく

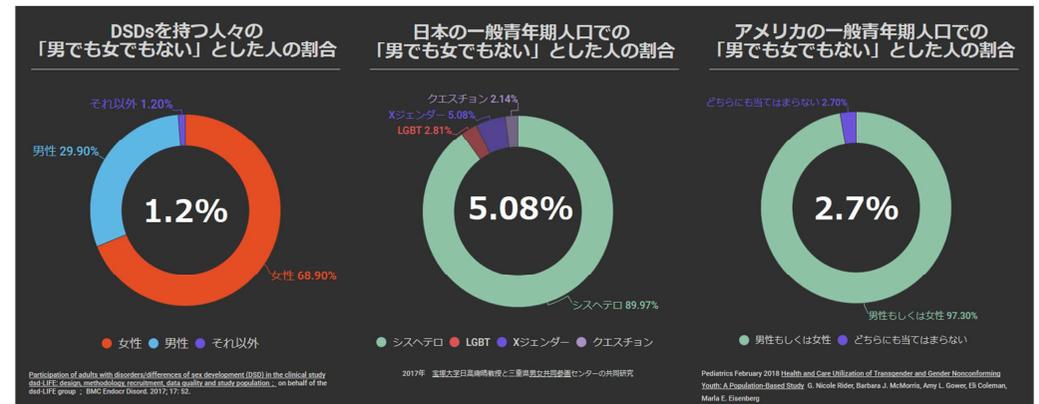
- 「染色体、性腺、もしくは解剖学的に**体の性の発達**が先天的に非定型的である状態」
- すなわち「染色体や性腺・内性器、外性器の形状、性ホルモンの産生などが、一般的に男性ならばこういう体の構造・女性ならばこういう体の構造とされている**社会生物学的規範**とは、先天的に一部異なる発達をした体の状態」

「こうでなければ(十分な)男性・女性とは言えない」という「**社会生物学的規範**」



- 実際は、「体の性の社会生物学的規範」によって、自分の女性・男性としての尊厳を損なわれている人々。
- 「性自認」の問題でもない。

性分化疾患を持つ人々の実際



- DSDs当事者は、自分が男性もしくは女性であるかどうかさえ、**ほとんど全く疑いを持ったこともない**
- むしろ、他人が自分を完全な男性・完全な女性として見てくれるかどうか不安に思っている
- メディアやアカデミズムでは、社会の男女二元制度の意味の無さを表すために、DSDsが引用されることがあるが、当事者の大多数は、男性と女性の区別について疑問を投げかける必要性も感じていない

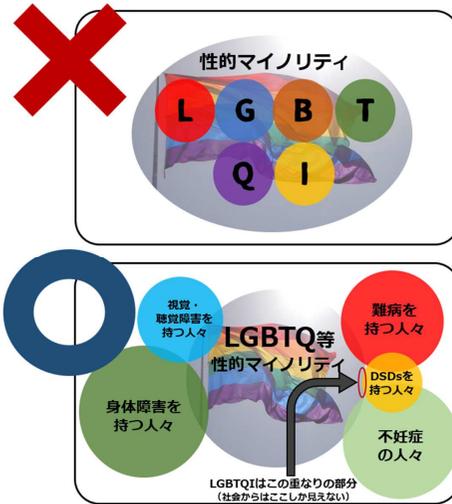
オランダ国家機関調査報告書 (2014)



An exploratory study of the social situation of persons with intersex/dsd

LGBTQ等の性的マイノリティの人々との関係

- 当事者のほとんどが、**自分たちはLGBTなど性的マイノリティの人々とは完全に異なる集団であるのに、混同されることが多い**ため、彼らとは距離をとることを望んでいる。
- 性別同一性に曖昧さを有する人は幾分LGBTなど性的マイノリティとのつながりを感じているが、**そういう人の数は限られている**。
- 性分化疾患を持つ人々が出会った**偏見**には次のようなものがある。
 - 性分化疾患を持つ人々は何が「**男性と女性の中間**」である。
 - 完全な男性・女性ではない。
 - 彼ら彼女らは**同性愛、トランスジェンダー**だ。
 - 皆、**曖昧な性器**である。



The Netherland Institute for Social Research(2014) Living with intersex/DSD An exploratory study of the social situation of persons with intersex/DSD

DSDs (体の性的話) と 性自認 (gender identity) の混同は…

たとえばガンや事故で子宮を失った女性に、
**あなたの体は女性とはもう言えないけれども
あなたが自分を女性だと思っているのだから
女性だと認めます。**

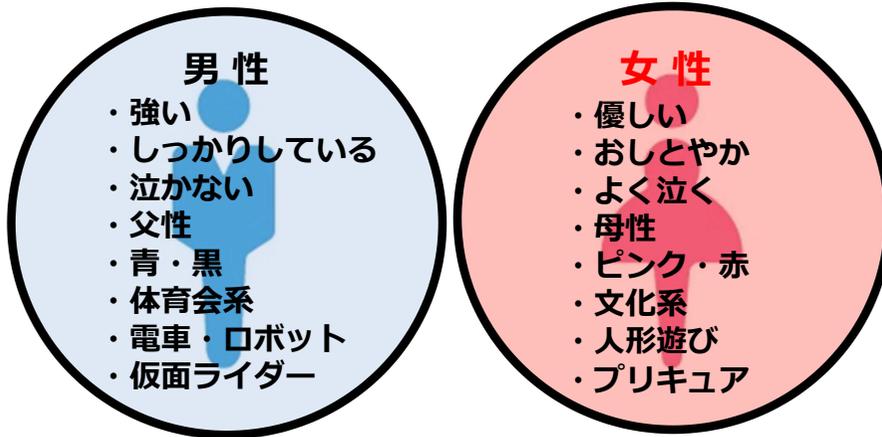
と言っているようなもの。

トランスジェンダー・性同一性障害の人々 → 「性自認」の話

DSDs (性分化疾患) → 女性・男性それぞれの体のバリエーションの話

←この混同も、背景に強固な「**社会生物学的固定観念**」がはたらいている。

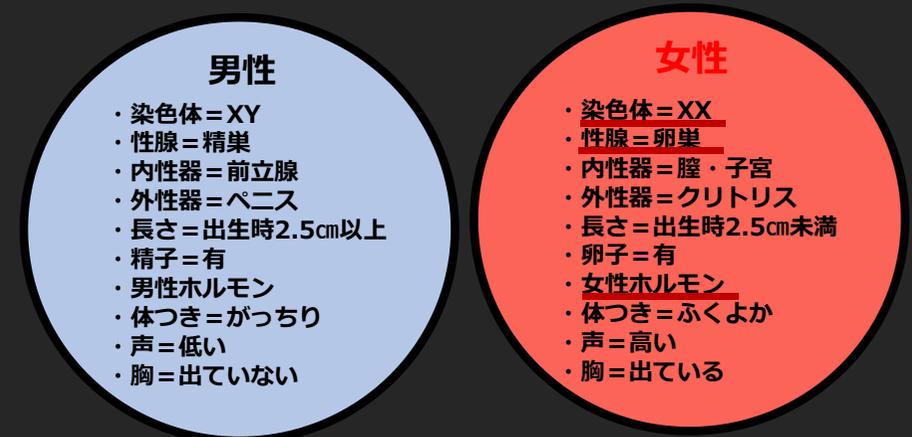
男性・女性であるための「社会的規範」



いわゆる「**男らしさ・女らしさ**」

しかし実際には、いろいろな男性・いろいろな女性がいる。

女性・男性であるための「社会生物学的規範」



容姿や体の状態など、「**こうでなければ (十分な) 男性・女性とは言えない**」という

社会生物学的規範・固定観念。

しかし実際には、女性にも男性にも様々な体の状態がある。

「XY・精巣＝男性」というのは、性分化疾患では神話に過ぎない。

Y染色体の神話を正す

- ・染色体は遺伝子（DNA）を入れるパッケージに過ぎません。
- ・Y染色体は、基本的にX染色体が「縮んだ」ものなのです。
- ・Y染色体の重要な遺伝子は、X染色体と同じものです。



体の性の発達に関わる遺伝学を説明する。

- ・体の性の発達に関わる遺伝子は、X・Y染色体だけにあるわけではありません。
- ・少なくとも20の遺伝子が体の性の発達に関係しています。（恐らく100以上）
- ・X染色体上の「体の性の発達に関わる遺伝子」は3つ。
- ・Y染色体上の「体の性の発達に関わる遺伝子」は1つ。
- ・実は他にもっと、2・3・4・5・8・9・10・11・12・17・19などなどの染色体上に、少なくともそれぞれ1つずつの遺伝子が体の性の発達に関わっているのです。

事実を共有する

- ・ほとんどの女の子／女性は卵巣を持っています。
- ・ですが、そうではない人もいます。
- ・ターナー症候群やスワイヤー症候群の女性は、「線状」卵巣です。
- ・AISを持つ女の子や女性は、卵巣ではなく精巣を持っています。
- ・精巣と卵巣は、構造的にも機能的にも似たものです。

事実を共有する

- ・娘さんの体は男性ホルモンに反応しないので、女の子に生まれてきました。
- ・ですが、精巣が子宮の発達を止めてしまったのです。
- ・娘さんの細胞はテストステロンに反応しませんので、体はテストステロンを女性ホルモンのエストロゲンに変換します。
- ・そしてそのエストロゲンは、思春期に女性の体の発達を促していきます。

Charmian A. Quigley, MBBS (2009) Disorders of Sex Development: When to Tell the Patient : http://www.accordalliance.org/wp-content/uploads/2014/11/Quigley-LWPES_PAS_mini_course_may09_for_Accord.pdf

思春期前後の判明で、女性の高アンドロゲン状態を呈する性分化疾患



体の細胞全体のアンドロゲン受容体が機能しない
完全型アンドロゲン不応症（CAIS）



体の細胞の一部のアンドロゲン受容体が機能しない
部分型アンドロゲン不応症（PAIS）



体の細胞全体がアンドロゲンを受容する
5α還元酵素Ⅱ型欠損症（5ARD）
17βHSD欠損症（17βHSD）

- ・高アンドロゲン状態は、血中アンドロゲン量だけではなくレセプターが関わるため、血中量の測定だけでは「優位性」は測れない。
- ・そのため、「アンドロゲンでの優位性」を測定するには、女性選手の「**身体的性的特徴**」を測定することになる。

IAAFの新アンドロゲン規制

- ・「**女性競技の公平性**」を保つためという目的。
- ・ IAAFの分析によれば、5競技についてアンドロゲンの量が大きな違いをもたらすとされているが…
 - ・ 一番はハンマー投げ（4.53%）、次は棒高跳び（2.94%）。
 - ・ 以下、400M（2.73%）、400Mハードル（2.78%）、800M（1.78%）。
 - ・（1500Mについては影響なし。マイル走は分析されず。）
- ・ しかし、規制対象種目が、**セメンヤが**出場している400M～1500Mのみに限定され、**実質上セメンヤの締め出しを目的**としたものに。
- ・ スポーツ仲裁裁判所は、**男性と女性のアンドロゲンレベルでの違いは10～12%ほど**としていて、**規制対象の400M～1500Mでの女性のアンドロゲン値でのパフォーマンスの違いは実はそれほど大きくない。**

IAAFの新アンドロゲン規制の問題点

- ・ 更に今回の新アンドロゲン規制に関わった医師のヘルモンは、「**性分化疾患を持った女性選手には、男女以外の第三の性別枠での競技を与えれば良い**」と発言。
- ・ しかし、性分化疾患を持った人で自身を「男でも女でもない」と自認する人は極めて少なく、むしろ女性・男性としての尊厳を損なわれ、他人が自分を女性・男性として認められないのではないかと怯えて生きていて、第三の性別枠をあてがわれることは、その人の「見世物小屋」扱いのような重大な人権侵害となる。

3. 現在の問題点

女性差別と有色人種差別の問題



女性差別の問題

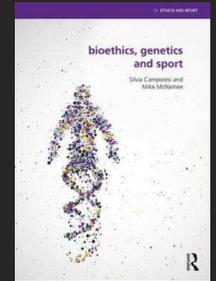
もし女性が規準を満たさなければ、外科手術やアンドロゲン抑制治療を受けねばならないという考えになっている。

しかし男性にはそういう必要が課されることはない。もし女性が卓越したパフォーマンスを発揮しすぎたり、男性の成績範囲に近づきすぎたりすると、競技の公平性を保証するためには、そういう外れ値は抑制される必要がある。そんな考えがスポーツにはどうもあるらしい。

現実的には、ある選手がチャンピオンになるには、他にもさまざまな遺伝的要因や生物学的要因もあるし、それにトレーニングや精神的強さなども関係するはずなのだ。

キャスター・セメンヤとポルトを比べてみるなら、彼女は別に外れ値ということにもならない。

The unequal battle: privilege, genes, gender and power: Anna Kessel (2018) : The Guardian記事より



Silvia Camporesi
ロンドン・キング大生命倫理学者

女性差別の問題

「アンドロゲンでの優位性」を測定するための、女性選手の「身体的性的特徴」のパラメーター

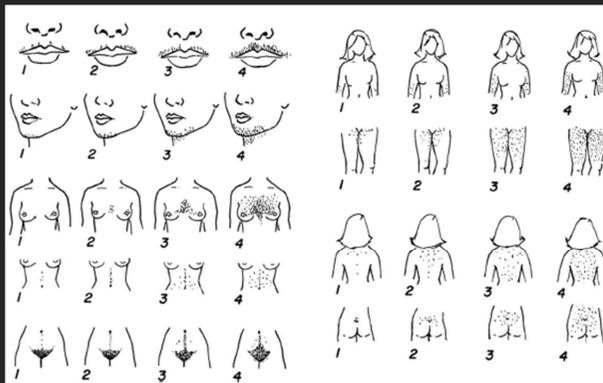


Figure 4. Ferriman-Gallwey Scale (1961). Reproduced with permission from Martin, Kathryn and Jeffrey Chang. 2008. "Evaluation and Treatment of Hirsutism in Premenopausal Women: An Endocrine Society Clinical Practice Guideline." The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism. © Oxford University Press



The Masculine Mystique of T
Katrina Karkazis



Katrina Karkazis
エール大生命倫理学者

Katrina Karkazis and Rebecca M. Jordan-Young (2018)

The Powers of Testosterone : Obscuring Race and Regional Bias in the Regulation of Women Athletes

女性差別の問題

「アンドロゲンでの優位性」を測定するための、女性選手の「身体的性的特徴」のパラメーター

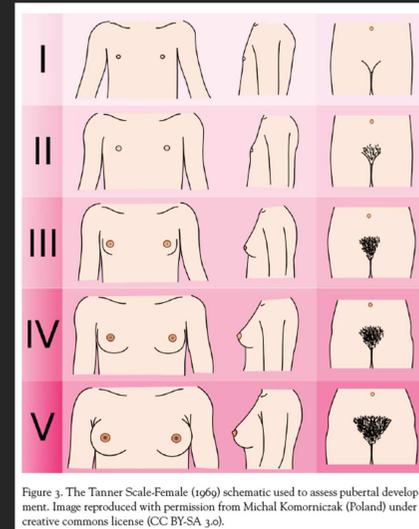


Figure 3. The Tanner Scale-Female (1969) schematic used to assess pubertal development. Image reproduced with permission from Michal Komorniczak (Poland) under creative commons license (CC BY-SA 3.0).



The Masculine Mystique of T
Katrina Karkazis



Katrina Karkazis
エール大生命倫理学者

Katrina Karkazis and Rebecca M. Jordan-Young (2018)

The Powers of Testosterone : Obscuring Race and Regional Bias in the Regulation of Women Athletes

女性差別の問題

「アンドロゲンでの優位性」を測定するための、女性選手の「身体的性的特徴」のパラメーター

ベルモンは、第1レベルに婦人科検査を含めるべきであることを、太字で大文字で3つともプラスサインを使って重要性を強調しながら明言している。彼は、クリトリスのサイズこそが「virilization(男性化)」のレベルに関する最適な情報を与えるものです」と主張しているのだ。テストステロンによってその女性が「男性化している」かどうかである。クリトリスは、いわゆる優位性を占う必須条件と言うわけだ。

[...]この評価基準は、性別検査に使う以外にも、一部の女性に疑惑を投げかける役割を果たしており、これは、すべての女性選手の体つきや容姿がジロジロ詮索されることにつながることになるのだ。



Katrina Karkazis
エール大学生命倫理学者

Katrina Karkazis and Rebecca M. Jordan-Young (2018)

The Powers of Testosterone: Obscuring Race and Regional Bias in the Regulation of Women Athletes

もしセメンヤのようなアスリートが最初のホルモンスクリーニングに引っかかると、どれくらいテストステロンが有利に「はたらいしているか」、さらに詳細に調べることになる。

医師たちはどうやってそれを調べるか？ まず彼らは彼女の細胞のレセプターがどれくらいテストステロンに反応するかを調べるだろう。そしてそのレセプター異常で既に知られている遺伝子をスクリーニングする。彼女の声の音がどれくらいしわがれ声か測定し、彼女の陰毛と乳房の発育を物差しで図り、筋肉量を測定し、彼女の陰唇のサイズを図り、彼女の膣を触診し、彼女の肛門生殖器の長さを図る。

別の言葉で言えば、彼らは、彼女が、「インターセックスの状態」によって、どれほど「男性化」しているか、どれほど「男になっているか」、測定しようとしているのだ。

想像してみてください。医師が、あなたの陰毛の長さを物差しで図り、あなたの膣が膣であるかどうかを、確かめようとしている場面を。あなたを女性として見なしていいかどうか測定している場面を。私はそんな処置の場面を考えるだけで身の毛が震え、胸が痛くなって苦しくなってくる。この一連の出来事というのは、男性によって支配されたグループによって作られた、男性が考えるところの十分な女性性というものでもって、女性を定義しようとする、もう古いはずのシステムとほとんど響きが違わない。

Diana Moskovitz (2016) "The Debate About Caster Semenya Isn't About Fairness"

有色人種差別の問題

スポーツにおける「性別テスト」に関わる生殖器検査の様々な分析は、黒人女性の生殖器の歴史的病理化と呼応していることが指摘されている。

人種や国家の状況が、性的な(非)典型性の認識にいかん影響を与えているのかについて書いたMagubaneは、「17世紀から20世紀まで、南アフリカ、アメリカ、そしてヨーロッパの医学テキストが一致していた点の1つは、**畸形の曖昧な外性器、特に陰核肥大、陰唇肥大は、アフリカ系の女性に特に一般的なものであるという点だった**」と述べている。[...]



Katrina Karkazis
エール大学生命倫理学者

The Powers of Testosterone: Obscuring Race and Regional Bias in the Regulation of Women Athletes
Katrina Karkazis and Rebecca M. Jordan-Young (2018)

4. 性分化疾患を持つ人々の

「標本化 (OBJECTIFICATION)」



性分化疾患を持つ人々の「標本化 (OBJECTIFICATION)」

19世紀

性分化疾患を持つ女性は現代でも



L
G
B
T
I
Q
A



スライド2

ホットントット・ヴィーナス

南アフリカ、コイコイ族の女性。「**コイコイ族の女性は陰唇が肥大している**」ということから、イギリスで見世物小屋で働かされ、死後はその性器が「標本」として扱われる。

CAISを持つ黒人女性

人権問題を取り上げるセミナーの中で、「**CAISの女性は脇毛が生えない**」ということを示すために現代の日本で用いられた、CAISを持つ黒人女性の画像。

性分化疾患を持つ人々の「標本化 (OBJECTIFICATION)」

多様性により理解や共感がはぐくまれ、多彩な豊かさを生み出すというのだ。しかし、この種の考え方は、実際に子供の立場で考えてみると、私には疑問だ。**子供を社会の進歩のために、生け贄として差し出しているように思えるのだ。私は私の子供を、そんな大きな戦いに参加させることにはためらいを覚える。**



アリス・ドレガー著・針間克己訳『私たちの仲間』

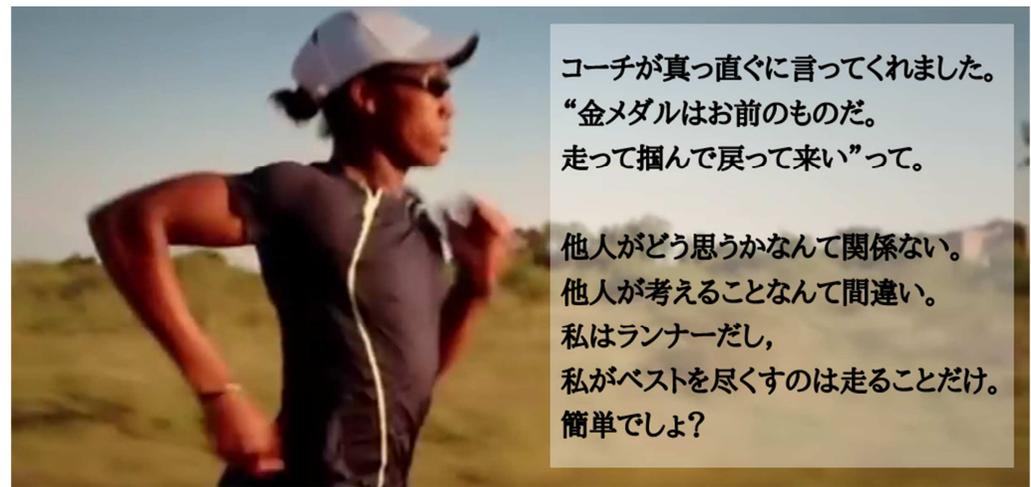
Alice Dreger
前ノースウェスト大学生命倫理学者



5. ONE TRACK MIND 一途な魂



キャスター・セメンヤさん

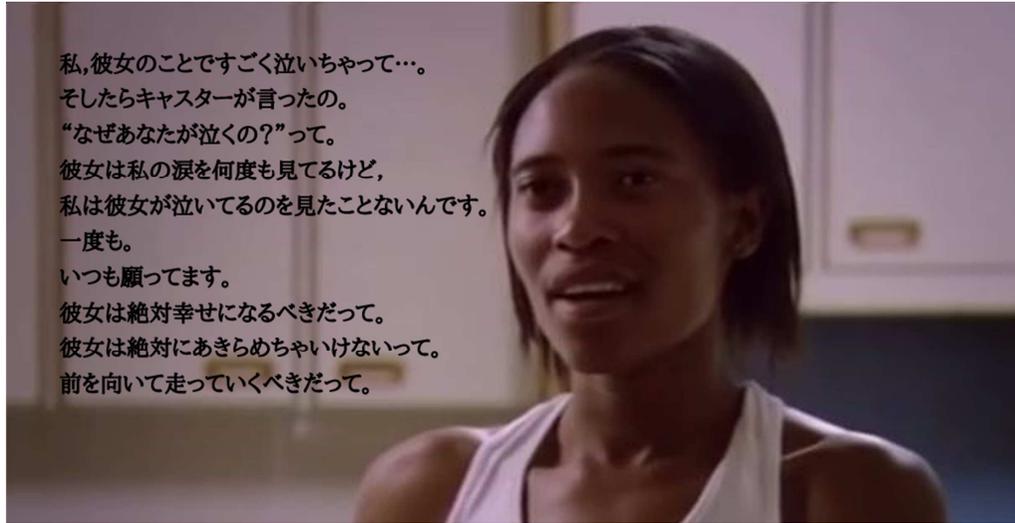


コーチが真っ直ぐに言ってくれました。
“金メダルはお前のものだ。
走って掴んで戻って来い”って。

他人がどう思うかなんて関係ない。
他人が考えることなんて間違い。
私はランナーだし、
私がベストを尽くすのは走ることだけ。
簡単でしょ？

セメンヤさんの友人

私、彼女のことですごく泣いちゃって…。
そしたらキャスターが言ったの。
“なぜあなたが泣くの？”って。
彼女は私の涙を何度も見てるけど、
私は彼女が泣いているのを見たことないんです。
一度も。
いつも願ってます。
彼女は絶対幸せになるべきだって。
彼女は絶対にあきらめちゃいけないって。
前を向いて走って行くべきだって。

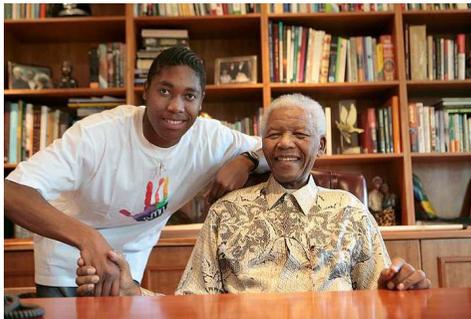


セメンヤさんのお母さん



誰かがあなたについて話すことなんて信じなくていい、
あんな人達の言葉は一切聞かなくていいって言いました。
あなたは自分のことは自分で分かってるんだからって。
それに、娘には謙虚であるように言いました。
自分が持って生まれたものだけにプライドを持たないで、って。

南アフリカの子どもたち



ネルソン・マンデラは人種差別と戦って、
セメンヤはスポーツで女性差別と戦ったの。
彼女は7年戦い続けた。

南アフリカ ザーラさん(10歳)



(セメンヤはお手本になる?)
うーん、分かんない。
彼女は走るのが好きなだけだろ?お手
本なんかになりたくないんじゃない?
だって彼女は見世物じゃないもん。

南アフリカ マフメドくん(10歳)

6. 資料



問題点（1）女性選手に対する陵辱的な扱い

- 性別判定検査の侵襲性：思春期前後以降に判明するDSDsの場合、その診断自体がトラウマ体験になるところ、**どうい内容かも伝えず、侵襲的・陵辱的な検査を強制的に受けさせられ、性的トラウマともなりかねない点。**
- その上で、アンドロゲン基準値を超えるとされる場合は、**出場資格剥奪**、もしくは**医学的・薬理的「治療」を強制される点**。陵辱的な検査によるトラウマだけでなく、**選手生命も絶たれ、資格剥奪の事実から私的な体の状態を公に推測されるような状況に追いやられる。**

もしセメンヤのようなアスリートが最初のホルモンスクリーニングに引っかかるかと、テストステロンが有利になるほど「はたらいているか」、さらに詳細に調べることになる。医師たちはどうやってそれを調べるか？まず彼らは彼女の細胞のレセプターがどれくらいテストステロンに反応するかを調べるだろう。そしてそのレセプター異常で既に知られている遺伝子をスクリーニングする。彼女の声がどれくらいしわがれ声か測定し、彼女の陰毛と乳房の発育を物差しで図り、筋肉量を測定し、彼女の陰唇のサイズを図り、彼女の膣を触診し、彼女の肛門生殖器の長さを図る。別の言葉で言えば、彼らは、彼女が、彼女の「インターセックスの状態」によって、どれほど「男性化」しているか、どれほど「男になっているか」、測定しようとしているのだ。

想像してみてください。医師が、あなたの陰毛の長さを物差しで図り、あなたの膣が膣であるかどうかを、確かめようとしている場面を。あなたを女性として見なしていいかどうか測定している場面を。上の文章の科学的視線の冷たさをとらえず考慮したとしても、私はそんな処置の場面を考えるだけで身の毛が震え、胸が痛くなって苦しくなってくる。



問題点（3）有色人種差別の問題

- 高アンドロゲン規制になってから、**性別判定検査の対象とされた選手が有色人種のみに限られている点。**
- 白人社会の目からは、**有色人種女性をして、その容貌や体つきから、「女らしくない」「男のようだ」というステレオタイプな差別的認知**があるとされている。
- 更に背景には、白人社会において、黒人女性が肉体力労働に適しているという偏見があったり、**歴史的には「標本」のように扱われたという経緯**。
- リオ五輪セメンヤ優勝時、**白人女性選手たちから人種差別的な発言**が出ている。

セメンヤへの中傷が、女性競技で彼女が競技する「問題」をほのめかす時、実はそのような議論は彼女をある特定の眼で見るように誘っている。それは、人種差別的な偏見の眼へと常につながっているのだ。リオ五輪女子800Mで6位だったリンゼイ・シャープは、競技後の涙ながらのインタビューで、セメンヤや銀・銅メダリストの黒人女性選手と競技することが「どれだけつらいことか皆分かってくれるはず。」と述べた。5位のジョアンナ・ジョズウィックは、あのメダリストたちは「テストステロン値がとて高くて、**男性に近い人達、なんであんな顔・体なのか、どんな容姿なのか、どんなふうになるのか、見れば分かるでしょ。」と主張した。**

ジョズウィックは更に自分の言わんとすることをはっきり明言している。「私は（競技のゴールラインを切った）最初のヨーロッパ人であること、**1位の白人であることを嬉しく思っています**。」つまり、あのメダリストたちは黒くて速く走った（けれども、レコードとして記録されるべきじゃない）と。ジョズウィックとシャープの「明らかな」問題はここにある。だって、女子800Mの世界記録保持者である白人女性のヤルミラ・クラトピロバは、彼女の女性性を疑われるようなこんな目にはあっていないのだから。

このような傾向は、「**黒人を動物的に見るステレオタイプの現代的な延長**」と呼ばれている。



問題点（2）女性差別の問題

- 女性選手のみが、競技成績が良いと、**医学的・薬理的「治療」を受けさせられる点。**（逆にドーピングを受けさせられる）。
- そもそもオリンピックに出るような競技者は、身体的には生まれつき特異的な、類まれなる才能を持っていてもおかしくないのに、女性選手だけは問題視され、男性選手の場合はどれだけ特異的な身体であったとしても「規制」・「治療」されることはなく、称賛されている。
- 検査対象となる判断が、競技成績だけでなく、**女性選手の体つきや容貌**についてでもある点。

テストステロンが女性選手にどう影響するのか、大量の記事が溢れている。しかし実際テストステロン値基準というのはかなりいい加減なものだ。**女性性の定義という、オリンピックで長く続く強迫観念。その不都合な事実を避け続けているだけなのだから。こういう強迫観念により、時に女性は裸で世界中をパレードされ、女性である証明書を得るために彼女たちの外性器が検査されるのだ。染色体を調べるための口腔粘膜検体採取が採用されることもあった。しかしこのシステムにも問題があった。オリンピックは1999年に染色体検査を止めているが、必要ならば性別検査の権利は保ち続けている。**

つまり、多くの女性選手の最大で単一のステージであるオリンピックは、**誰が女性なのか？という判断を今でもしているのだ。その基準は変化しても、そういう態度自体は変わらないままに。**この一連の出来事というのは、男性によって支配されたグループによって作られた、男性が考えるところの十分な女性性というものをもって、女性を定義しようとする、もう古いはずのシステムとほとんど響きが変わらない。



問題点（4）マスメディアでの報道の問題

- セメンヤさんの**極めて私的で最もセンシティブな領域であるはずの「性器」に関わる話を、善意であれ悪意であれ、マスコミ等でまるで当たり前のように「社会的議論」が交わされることになるのは必至です。**
- 自分や自分のお子さんがそういう立場に置かれればどうか、少し想像力があればそれが**かなり異様な状況**だと分かる人もいますが、DSDsに対してはもともと「**珍しい症例**」や「**生物学的・社会的に興味深い例**」という捉え方が強く、**そこに人格やプライバシー、尊厳といった犯すべからざるものがあることが、完全に忘れ去られてしまう傾向**があります。

リポーターたちは彼女を「インターセックス」と呼びつけた。しかし私は、セメンヤ自身が自分をインターセックスだと言ったというリポートをひとつも見つけられなかった。そして**彼女は、彼女をニュースの売りモノにされてしまうことも、彼女を「インターセックス選手」と呼ぶ記事も止めることはできない。**「世界は黒人のクイア（LGBTQ等性的マイノリティのこと）でインターセックスの選手を受け入れる準備はあるか？」というタイトルの記事もあった。しかしセメンヤは自分をクイアだとも断っていません。

彼女の人生は、ますます彼女のものではなくっていった。セメンヤの身体は、リポーターたちが必要とするものだったらどんなものにもなっていった。ケイト・ファーガン（有名な女性スポーツコラムニスト）がTwitterで語ったとおりに、「**セメンヤは女性だって分かるわ。だってみんなして彼女の身体を自分のモノみたいに扱ってるから。**」



絶対的な「公平」などない。だとしたら、みんなで知恵を出し合って最善の方法に近づける必要があるのではないかと思います。2年後には東京五輪があります。それを、スポーツでの性別や公平性について話し合う「 **equalityの機会**」にどう活かすかが...



問題点（5）国内のDSDsを持つ患者家族への影響

- すでに日本国内でも、思春期前後にDSDsが判明し、暗黙のうちにスポーツ競技を諦めた女性がいまいます。このようなケースはこれからも確実に発生します。
- ただでさえ自殺念慮率が高い障害です。セメンヤさんのオリンピックでの扱いや、メディアでのDSDsに対する「男でも女でもない」といった偏見や誤解に基づいた報道は、**スポーツに夢見ているDSDs当事者の女の子や、それ以外のDSDs当事者家族の心、生活や人生に多大な傷を与えています。**

診断自体でもトラウマ体験になります。

診断を告げられたこと簡単に言えば、**突然炎に包まれて焼死して男女の区別が分からなくなるくらい焼く焦げて、検視官にこれは男性だと言われたみたいなものでした。**

XY染色体が判明した女性

結果は、XY染色体。この婦人科医は私に、あなたにはペニスがあると云ってのけました。私はとてもショックを受けて、そんな酷いことを何のセンチタイプさもなく言つてのけることに、心の中でその医者の彼女を殴り倒したくなりました。

XY染色体が判明した女性

社会やマスコミでは、今でも誤解や偏見が多いままです。

テレビ局から質問依頼があって。私は参加しませんでした。だって何がしたいの？って思いましたから。手術についてとか、男性と女性の境界についての質問でした。『ちがう、そんなことじゃない』って思って、それってまた『見世物小屋』になるってことです。ああいうのは『見世物小屋』なんです。

思春期にDSDが判明した女性

思春期前後に判明したDSDを持つ女性の62%は自殺を考え、23%は実際に自殺行動にでている。

Hands Off Caster! (キャスターから手を離せ!)

南アフリカは「キャスター・セメンヤ規制」に強く抗議する。

今回のまるで若い聖子のような規制の導入は、不当で差別的、非人間的なものです。世界中の人権擁護者の皆さんには、強い抗議をすることを求めます。アフリカ女性の体格を不当に人種差別的な視座で見つめ、見せ物のようにする辱めはこれまでも今でも続いています。もうこんなことは繰り返してはなりません。



IAAFの女性選手に対する新アンドロゲン規制は、差別的であり、不合理であり、不公平です。

このことでまた奥目に罵られるのを強要されてきたことは、とてもつらい思いをしました。私自身はこの新規制について何も言いたくありません。私はただ、生まれたまま自然のままに走りたいだけです。私が何かをやるべきだと責められることも、私が何者かと判断されることも、不公平なことだと感じています。私はモックガディ・キャスター・セメンヤ。私は女性です。そして、私は速い。



#HandsOffCaster She's our Gift! #Caster4Gold



南アフリカ陸上連盟とセメンヤさんは、IAAFの高アンドロゲン規制に対してスポーツ仲裁裁判所に提訴（判決は2019年3月末予定）。南アフリカでは、これまで長く続く黒人女性差別を背景に、「私たちの女の子」として、政府・国民の国を挙げてのセメンヤさんの擁護を行っている。

西欧社会のクオリティ・ペーパーも

The Guardian: Caster Semenya is the one at a disadvantage. Sisonke Msimang. The irony of privileged athletes with their nutritionists, physio and sports psychologists pointing fingers at those whose over-reliance is laughable.

The Guardian: The treatment of Caster Semenya shows athletics' bias against women of colour. Katrine Karkazis and Rebecca Jordan Young. Sex testing rules on testosterone levels in female athletes disproportionately affect athletes from the global south.

The Guardian: Track's New Gender Rules Could Exclude Some Female Athletes.

The Guardian: You Say You're a Woman? That Should Be Enough. By REBECCA JORDAN YOUNG and KATRINA KARKAZIS. The International Olympic Committee's new policy governing sex verification is expected to ban women with naturally high testosterone levels, a condition known as hyperandrogenism, from women's competitions, claiming they have an unfair advantage.

The Guardian: Understanding the Controversy Over Caster Semenya.

The Guardian: The ignorance aimed at Caster Semenya flies in the face of the Olympic spirit. Katrina Karkazis. In pressing their case on hyperandrogenic athletes the IAAF have revealed how far away from the Olympic spirit they are.

当初は「両性具有」「男でも女でもない」とした誤解偏見に基づいて、女性競技の「公平性」や、「競技を男女に分けることへの疑義」といった表層的でセンセーショナルな記事が中心だったが、**現在では、「両性具有」といったセンセーショナルな取扱の反省や「女性差別」の問題として取り上げることが中心に。**

日本では・・・

日本では海外での議論の深まりがほぼ伝えられず、メディアレベルでは今でも「両性具有」「男でも女でもない」とした誤解偏見、トランスジェンダーの人々との混同に基づく記事、「男女の境界を問う」という大上段な記事がいまだに多いが・・・

withnews: 「生物学的に女性ではない」とされた銀メダリスト、どう向き合えば? 総論的「公平」などない。だとしたら、みんなで知恵を出し合って最善の方法に賛同する必要があるのではないかと感じます。2年連続は東京五輪が楽しみです。これを、一足一歩ずつの進歩が実現することによって、「両性の境界」を大きく引き延ばす。

withnews: 「両性具有」の南ア選手が残した課題 両性の境界ではない、トランスジェンダーといふのは、少し違う。トランスジェンダー、両性具有。#南アのセメンヤ選手は金メダルを獲得した。

一般レベルでは、「持って生まれた才能・個性を何故変えなくてはならないのか?」という当たり前の見方が出てきている。

しろ丸 @shiro_maru: 【男性ホルモン値の新制限、セメンヤが「標的」と物議醸す 陸上: AFPBB News】afpbbs.com/articles/-/317... 『生まれつき同値が高い選手は、薬で基準以下に抑えなければ大会に出場できなくなる新ルール』ドーピングしろってか?

わん太 @wanata: 男性ホルモン値の新制限、セメンヤが「標的」と物議醸す 陸上: afpbbs.com/articles/-/317... @afpbbscomさんから おお〜、男性ホルモンが生まれつき高いけど女性として生まれ女性として育った選手が出場制限を食らうのか、ホルモン値をわざわざ下げるための薬物の使用はOKってすげえな

りょうま Ryow @ryowma: セメンヤさん、白人だったらだいたい対応変わったと思う。しかもどちらかと言えばポジティブな方向に。ネガキャンになるのは人種差別がある。

俺はベンギンをやめたぞジョジョ... @namurako: なんでもチャンド選手がまたニュースになってるんだ DSDは体質 くらいにとらえればいいのに 女性は女性だよ

Anzu Honda / 本田 杏子 @Anzuhonda: 同じく陸上競技愛する皆さんに、一緒に声をあげてほしい。2009年、女子800mで素晴らしいレースをしたセメンヤ選手が、今国際陸連によって選手として、ひとりの人として侵害を受けています。

1991年

- 南アフリカの最北部貧困地帯である付リンボポにて出生。出生名はキャスター・モックガディ・セメンヤ。モックガディとは「男子に人気の女の子」の意味。何の疑いもない女の子の誕生であった。

2009年

- 18歳時、世界陸上ロンドン女子800Mでの金メダル獲得後、記録や体型・顔立ちから、性別疑惑の汚名を着せられ、国際陸上競技連盟 (IAAF) が、セメンヤに何の検査が明らかにならず、「性別判定検査」を行う。
- 9月11日：シドニー・モーニング・ヘラルド等が、「子宮が無く精巣があり、通常の女性の3倍以上のアンドロゲンを分泌している“両性具有”であることが分かった」と「暴露」報道。(結果は本人に知らされていない)。
- 以降世界中のメディアがセメンヤの「性別疑惑」を喧伝。「女性ではなく男性・両性具有なのだから、女性競技の公平性から競技参加を認めるべきではない」という議論、「第三の性・性自認を認めるべきだ」という議論があふれる。
- 11月のIAAFの理事会で最終判断が行われ、セメンヤの金メダルは確定、性別検査の結果は公表されないと発表。
- 以降セメンヤは非公式に大会への出場を求められていたが、セメンヤはこれに反発。
- セメンヤはしばらく、南アフリカの自殺予防センターに入っていたと言われている (非公式情報)。

2010年

- 7月6日、IAAFはセメンヤの女性として競技復帰を認めることを発表。フィンランドの国際競技にて競技復帰。
- しかしセメンヤの競技復帰は、非公式だが血中アンドロゲン値を抑制する薬理的「治療」を条件としたものだった。
- IAAFは女性選手に対して「治療」でアンドロゲン値を抑制しなければ競技参加を認めない「高アンドロゲン規制」を発表。
- 南アフリカでネルソン・マンデラがセメンヤと面談。以降南アフリカ政府はセメンヤを全面的に擁護する体制に。

2014年

- インド陸上連盟が、同国の女子100M選手デュティ・チャンドの「性別疑惑」により、彼女に「性別判定検査」を受けさせ、出場資格を取り消す。デュティ・チャンドはスポーツ仲裁裁判所 (CAS) に提訴。

2015年

- CASがチャンドの提訴を受け、IAAFの女性選手に対するアンドロゲン規制の保留を決定。
- 以降、セメンヤに対するアンドロゲン規制も保留され、薬理的「治療」なし (非公式情報) で競技に参加できるように。

2016年

- リオオリンピックに、セメンヤは女子800Mと1500M、デュティ・チャンドは女子100M競技に参加。
- やはり世界中 (特に西欧社会) で、二人の「性別疑惑の議論」があふれる。
- 南アフリカでは、そのような「白人社会での議論」を、セメンヤに対する「黒人女性差別」として、Twitterなどで「#Hands offCaster (キャスターから手を離せ)」キャンペーンを繰り広げる。
- 南アフリカ選手団はセメンヤをリオ五輪閉会式の代表旗手に。国として彼女を擁護することをアピール。

2018年

- 4月IAAFが、血中アンドロゲン値が5ナノモル/リットル以上の女性選手は「治療」でアンドロゲン値を抑制しなければ競技参加を認めないとする、新たな「高アンドロゲン規制」を11月より実施すると発表。「女性競技の公平性」を目的としているが、規制対象競技を実質上セメンヤが出場する女子陸上400Mから1600Mの種目のみに限定。
- 南アフリカ政府は黒人女性差別として強い抗議声明を出し、6月、セメンヤとともにCASに提訴 (判決は3月末予定)。
- 10月、IAAFは提訴を受け、新アンドロゲン規制を2019年3月末までの保留延期を発表。